

あなたの子どもは
抱かれた腕の中で
生涯を決めている

蝶は花に、ハエは糞に集まる。

川本富士夫

【記憶のない乳幼児期に生涯が決まる】

吉塚駅そばのサンデーストアで餃子を買って、東公園の藤棚の下で食べた時のことである。老いたカラスが常連顔で飛来したのでいつものようにちぎって放ってやった。

カラスは片足で踏んづけて上手についばんでいる。それを、砂場で遊んでいた小さな男の子が見て駆け寄ったためカラスは飛び去り、母親もあとから来て私に頭を下げた。そこで次のような話をした。

「子どもがこれくらい小さいときから、何でも自分で決めていいというメッセージを親が出しておくと、非常に正しい判断をするようになります。なぜなら決定権を与えられたからです。自分のことを自分で決められる時に、わざわざ悪い子になってやろうとする子どもはいません。それをさせずに、世の中の役に立つ人になりなさいなどと親の決定に従うように仕向けたら、拒否できない内容であるがゆえに思考を止め、親からあやつられている感覚に支配されます。自己決定力が備わる機会を逃（のが）してしまうと、チャレンジしようとする気持ちなど生まれれるわけがありません。決定権を子供から取り上げないことが、今はいちばん大切です」。

すると母親は目を丸くして、なぜそんなことを教えるのかと聞く。

「私にはあなたくらいの娘がいて、孫もこの子くらいだからです」と答えたら、「今日いい話を聞いた。夫にも話そう」と、娘みたいにうれしそうな顔をした。

今これを読んでいるあなたの、最初の記憶は何歳くらいだろうか。

私の最初の記憶は、縁側に座っている曾祖父（「ひい爺さん」）の前で、同い年のヒデちゃんとかけっこして、ガラスの壺に入っている水飴をもらったことで、たぶん四歳のころである。あるいは、もう歩けるのに乳母車に入れられて、中から両親の農作業する姿を見ていたことである。田んぼのまわりで遊ばせて溝（みぞ）にでも落ちたら困ると思ったのか、そばに弟がいたのかもしれない。これも四歳くらいときだろう。

人は、早くて三歳、普通は四歳か五歳くらいまでは記憶がないから、それまではずっと抱いて育てても甘やかされたことにならない。他方、記憶がなければ身を守る術（すべ）が備わらないので、むき出しのいのちは、生き延びるために、状況をすべて受け入れることになる。

だから、記憶のないときに豊かな愛情をもって接すれば、「自分はこの世に受け入れられている」という世界観を全身の細胞が獲得するし、一歳や二歳できびしく扱われたり、夫婦仲が悪かったりすると、「この世とは折り合いがつけにくい」という世界観を獲得する。からかいが激しければ、自分の卑下が確定する。そして記憶がないだけに忘れることができず、生涯にわたって固定する。

積極的な人や好奇心が旺盛な人、ほがらかな人や気さくな人、大抵のことをうまくやれる人、根がやさしい人、会った瞬間に親しみを覚える人など、好ましく思われる人は、記憶のない時期に十分な保護や愛情を受けた人である。

他方、「小馬鹿にされて走り回っているあいだは安泰」とする。パシリ体質や、「自分を守るには先に攻撃することだ」とするクレーマーやモンスター、がんばってれば認められるとの觀念に支配された「この汗見てくれ症」、身近な人のしあわせを許せない嫉妬症、「後ろからついて行きます」と言いながら背後から突いてくる卑怯者、ひれ伏せば助かると思っている負け犬根性、「上から目線で指示する立派ぶる人」などは、幼児期に十分な愛情に包まれなかったために、警戒や疑い、恐れの中で世の中を見て自己防衛しているのである。

記憶が生じてからのしつけについては、愛情を注がれた子供には効果が高い。この世から受け入れられていると思っているので、少々手厳しくしつけても、必要なものとして受け入れるからである。しかし恐怖やさみしさや苦しみの中で育つと、しつけを攻撃のように感じて反発する。この反発は防御（ぼうぎよ）なのだが、それを親も教育者も理解しない。

福岡市の馬出に住んでいた時、近所の旅館で傘立てが盗まれた。被害届を出した数日後に犯人が捕まり、刑事が報告に来た。泥棒の年齢は八十歳。孤独の身で親を知らず、橋の下に捨てられていたそうである。施設で育てられ、名前は市長がつけたという。旅館の店主は同情したが、窃盗をはたらいた老人にその感情はわからないはずだ。なぜなら敵だらけの中を生きてきたからである。乳児期に厄介者扱いされ、どんなことをしても生き延びてやると、全身の細胞が誓ったに違いない。もしも乳児院の職員が「あなたはこの世に大切な存在」の気持ちで温かく抱いて育てたら、こうはならなかっただろう。

「人は誰でも思った通りの自分になる」という言葉がある。古人は「三つ子の魂(たましい)百まで」と言った。

六十二を過ぎて、中学校と小学校の用務員職に就いた。それまではずっと民間におり、義務教育の現場は初めてだった。これはチャンスだと思つた。教師と子供と保護者がサンプルとして目の前にいる。そこで児童心理学の本を図書館で何冊も借りて読んだ。

その中の一冊にとっても興味深いことが書いてあった。

「遅くとも生後十二か月ごろには、泣いている乳児など苦痛を示す他者がそばにいれば、触れて慰める行動に出ることが知られている。さらに一歳半くらいで九割以上が、親が食器を並べたり、散らばつたカードを箱に片づけたり、紙くずをゴミばこに入れるのを、自発的に手伝うことが明らかになっている。」(子どものこころ児童心理学入門 有斐閣アルマ2014年)

これを読んだ私は「人は本来、善的な存在として生まれてくるのか」と心を打たれ、同時に「それなのになぜ、地球上から殺し合いが絶えないのだろうか」との疑問も持った。

するとその疑問を待ち構えていたかのように、田島誠一九州大学名誉教授(教育心理学)が、紫牟田(しむた)和男/元田川児童相談所長を介して、博多駅近くのイタリア料理店で食事をしませんか。支払いは気にせず、奥さんも連れてくればいい」との声がかかった。そこで文

野廣介／(有) 第一不動産社長、濱野彰彦／(株) ハウインターナショナルマネジャー、濱野未奈／学校事務職員 (北九州市) も誘い、総勢七人が集まった。

なごやかで楽しい時間が進む中で、田嶋名譽教授は私の質問に対して、「人は生まれたときから『模倣 (もほう) 』まねること」を『する習性があり、それではないか』と答えた。心理学でいうところの『模倣』の意味はほかのところにあるのかもしれないが、私は次のように理解し、もつともなことだと思った。

人間の赤ん坊は、ほかの哺乳類のように生後すぐに立ち上がって歩行することができない。そこで身を守るために、周囲の環境を模倣して『私はあなたと同じだから心配しないで』というサインを送るのではないだろうか。自分が泣けば母親が優しくあやしてくれる。そこで、身近く赤ん坊が泣いていれば母親の真似をするのだろう。そして歩けるようになったころには、模倣のたまものとして、未熟といえども社会性が芽生え、片づけを手伝うなどして周囲に喜ばれようとするのである。

世界のどんな片すみでも、生まれてきたら「おめでとう」と祝福される。たとえ望まれない命だったとしても、母親はよるこびの涙を流すはずである。だからたいの人は、国や人種や宗教の枠を超えて、乳児期から善が植えつけられていくことになる。

ところが、ごくごくまれに、生後すぐにわが子をきらい、ぐずれば叱り、泣けば叩く親もい

るだろう。それでも親に好かれたくて、片づけや掃除を手伝おうとすると、「どうしていつもじゃまばかりするの！」と激しく怒鳴って子どもの手を払いのける。するとその子は、善的な模倣をするると自分に危害が及ぶ」と、脳の理解より先に全身の細胞が記憶することになる。そこで、善とは逆を身に備えて、私もあなたと同じだから心配しないで」というサインを周囲に送るようになるのかもしれない。まさしく「子は親に似る」で、このあたりのことはすでに述べたとおりである。

そこで私は勤務先の小学校の校長に、本の内容と私の解釈を説明し、こう話した。

「どんな子もいい子に育ってほしいと願うのは私もいつしよです。でも教育で人は変わらないと思います。もしも変わるなら、教師はみんな聖者になってはいるはずですが、ところが先生方を見て、子供のときもこうだったに違いないというような人ばかりです。そして、それが個性であり、人としての魅力になっています。だから今の児童にたいして、変えようとするよりも、今のままだう生かすかを考えたほうがいいのではないのでしょうか」

むろん私は教育者ではないので、校長の耳にどう聞こえたかは知らない。でも子どもたちからすれば、今のままの自分を肯定（こうてい）的に見てくれる教師に心を開くだろう。たとえば子どもが間違っている、子ども自身はそうは思っていないので、いきなり叱られたり全否定されたりすると、「自分のいのちを守ろうとする機能」が発動して、身も心も固く閉ざさずである。

さて、どんな子も教師にさまざまな思い出を残して卒業していく。ところが親子の関係には卒業はない。親から見て、どうにか満足いくくらいに、あるいはそうならなくても、社会人として暮らしていけそうなら、子育てとしてはうまくいったと判断していい。

ところが「問題行動の人物」として迷惑がられる大人になつたとすれば、乳幼児期からずっと、親をはじめとする身近な環境が改善されなかったということである。こうなるとおそろしくよほどのことでもない限りその人は変わることはない。

ここであらう「その人が変わるよほどのこと」というのは、「芋虫がサナギになり、その背中が割れて蝶が出てくる」といったような、これまでの自分を脱ぎ捨てて、中から別の、使命を帯びた新しい自分が出てくるほどの激しい変化のことで、めったに起こることではない。

【人は自己肯定感(じここうていかん)の中で生きている】

人はだれもが、自己肯定感の中で生きている。

自己肯定感とは、「自分は今のままでいい」と、良いところも悪いところも含めて、自分のすべてを受け入れる前向きな感情のことである。

これまで私が出会った、数えきれない人たちの中には、個性はそれぞれあつたにしても、表情に余裕を浮かべて楽しそうに暮らしている人がいる半面、はた目にはうらやましがられるような境遇にあつても、どこことなく息苦しそうに生きている人もいた。たぶんその違いは自己肯

定感の大きさの違いによるものではないだろうか。

別の言い方をすれば「人は自分自身への良いイメージの中で快適に生きていこうとする」

というもので、それがあまりにも大きいために、他人までその中に招き入れ、快適な善の循環をつくっている人もいたし、それがあまりに小さすぎて、他者を寄せつけないどころか、初対面で牙をむき出す人もたまにいた。

付き合いのある隣近所や、勤め先、先輩や後輩の顔を思い出せば、なるほどと思う顔が思い浮かぶのではないだろうか。

私の見立てでは、自己肯定感⇒自分自身への良いイメージは、おそらく乳幼児期から少年期にかけて三つの要素からつくられるように思う。それは「ほめられる」「存在を認められる」「笑顔を向けられる」ことである。その三つについて簡単に説明しておく。

ほめられる⇒ほめられることをやった時だけでなく、何もしなくてもほめられること。ただしほめ言葉の中に取り引を混ぜると、子どもはほめ言葉を警戒するようになる。

存在を認められる⇒「今のあなたがいるだけでいい」という気持ちを伝えること。顔を向き合わせなくても、会話をしなくても、全身からその気持ちを発していることが大切。

笑顔を向けられる⇒笑顔には、プラスの声・感情・温もりなどの要素がすべて織り込まれている。笑顔の中で子どもは自分に自信を持ち、チャレンジ精神をやしなっていく。

こうして「自分は今のままでいい」と感じる前向きなイメージ。自己肯定感がつくられていく。それを勉強が後押しするのである。つまり学力は、自己肯定感の中でこそ意味をもつ。では、この三つがなければ子どもはどうなるだろう。

ほめられない。子供をほめると有頂天になって努力をしなくなるので、ほめるのは子供のためにならない。とのゆがんだ教育論から、「お母さんはそうはいきませんよ」とばかりに、子どもに冷徹な態度をとる。すると子どもは、自分には何が足りないのだろうと、自分を疑ってかかるしかなくなる。

存在を認められない。子どもの独立心を高める。という、親の身勝手な理由から、赤ん坊のときから何でも一人でやるよう仕向けられ、親にかまってもらえない。そのために、自分がこの世に二本足でちゃんと立っているという、存在基盤そのものが揺らぎ、たくましく生きていくためのさまざまな手法や判断基準が身につかなくなる。

笑顔を向けられない。子ども心に、周辺への警戒心が強まり、「自分が伸び伸びと生きていく空間はないのだ」と信じ込んで、自己否定感（＝自分は余計で無駄な存在だと感じる感覚）が広がっていく。それでも生きていかなければならないから、卑屈になることで相手の気を引き、関心を得ようとする。高学歴や高い地位にいる親の子どもも多い。

ところで、福岡県民全般へのメンタルヘルス（「こころ」と精神の健康）の普及・啓発活動や、児童相談所の所長を務めた紫牟田和男氏によれば、うまく社会に適応できる大人になるには、「あいさつができること」「ありがとうが言えること」「相談する力」の三つがあればいいという。

よくよく考えてみれば、あいさつも、ありがとうも、そして相談する力も、どれも身近な人に好意的に覚えてもらえるという面がある。紫牟田氏がこの三つを挙げ、学力について触れなかったのは、それよりも優先するとの意味も込められているのだろうか。

あいさつについて私は、「あなたが目の前にいることに気がついていて私がここにいます」という意思表示が根底にあると思う。そう考えれば、あいさつできるチャンスがあるのでそれをしないのは、「私はあなたにまったく関心がない」という意思に取られかねず、大きな損失につながる可能性が常にある。

ありがとうについても同様で、しかし多くの日本人は大人になってから、「どうもすみません」を感謝の代用にする場合が多い。遠慮や奥ゆかしさを込めたいのかもしれないが、ここは考え直したほうがいい。「どうもすみません」ばかり言うと、口の筋肉がそれを覚えてしまい、「ありがとう」が言えなくなる。さらに謝罪の言葉だから、顔に笑みが出ない。

相談する力については、人は相談されると、その人なりに考えてくれ、自分は信頼されているようだとも感じ、こころを開き、相手の記憶にも残りやすくなる。そして「その後どうなっ

た？」と、時間を置いて声をかけてくれるなど、互いの信頼やコミュニケーションが深まっていく入口にもなりやすい。

二十年くらい前に韓国の釜山で、流暢（りゅうちょう）な日本語をしゃべるお年寄りの女性に、地下鉄駅までの道をたずねたことがある。彼女と私は中央洞駅まで歩き、別れ際に彼女はこう言った。

「これから先、どこかで困ったことが起きたら、近くににいる人にたずねなさい。困っているのに黙っていたら、あなたは困っていない人になる」

私の中に深い了解が広がった。この言葉を聞くために彼女に話しかけたのかもしれないなかった。その時から私はこんにちまで、相談し、提案し、質問する人になった。わかっていることでも質問し、反応から相手のレベルを探った。わからないことを質問する時は、仮説を立てたあと質問した。そうやって自分の精度を上げていった。

しかしなかには納得できない人もいるだろう。「なにが自己決定力だ。なにが自己肯定感だ。子どもに自由を与えるとロクなことをしない。勉強ができなくて、どうしあわせになるというのか。あいさつもありがとうも相談も、無駄な人にまでやる必要はない」と。

その意見に対して私は、「あなたの住む星でそうなっているのなら、それはそうなのだろう」としか言いようがない。

これから、かつては子どもだった大人に、たとえ話をいくつか紹介する。たとえ話というも

のは昔から、いろいろな応用がきくから、心のどこかに止めておいて損はないだろう。

蝶（チョウ）は花に、蠅（ハエ）は糞（くそ）に集まる。（大和信春）

おそらく世界一短いたとえ話のはずだ。

蝶は花の蜜がおいしく、ハエも糞（くそ）がおいしい。それぞれの星に住んでいるというのはそういう意味である。だからどちら也正しく、とはいえ蝶は糞を食べず、ハエも蜜をなめたがらない。おいしくないからである。

だからあなたが、自分はどれかを知りたければ、自分ではなく周囲の人々を見ればよい。蝶が多ければあなたは花か蝶、ほとんどがハエなら、いくら否定しようがあなたは糞かハエだ。次は私のつくった、これもずいぶん短いたとえ話。

「同じ方向に同じ速度で走っている車は止まって見える」

これも蝶とハエの話と同じで、いつも仲良く接している人たちは、皆どこか似通って、自己と親和性がある。そしてその光景の積み重ねが、その人の世界観をつくるのである。

ずいぶん昔のことになるが、大和信春先生が私に、次のようなたとえ話をしてくれたことがある。

「路上を、二人の人間がすれ違った。一人はこの世にどう復讐してやろうかと考えており、もう一人は、この世にどうお返しをしようかと考えていた。果たしてこの二人は、同じ一つの星

で暮らしているといえるだろうか」

こういったことは日常の中に、ふんだんにある。ヤンキーはヤンキーの世界で生活し、同じヤンキーと結婚するようなことである。もしも日本のヤンキーが外国で暮らしても、その国のヤンキーしか目に入らないから、「世界のどこにも好ましいヤンキーがいる」というリアリズム¹¹生きた心地のする風景の中で生涯を過ごすことになる。そしてその世界を私は一度も見ることがはない。

小中学校の理科の授業で、太陽系について学んだ。真ん中に燃えている恒星の太陽があり、その引力にとらえられた八つの惑星が回っていて、そのなかには、衛星が公転している惑星もある(例¹²地球と月)。この光景も、花と蝶、あるいは糞とハエの様子に似ていると私は思う。

「中心人物とそれを取り巻く人々」、あるいは中心は人ではなく、「目に見えない大きな力」ということもできる。中心に近い惑星ほど引力の影響を強く受け、遠くにあるほど影響は弱まってくる。

これらのたとえ話から、自分の子どもが将来どんな星で生活しそうかとの予測はつきやすい。おそらく地球と月のように、ある価値観の周辺を親子で公転しており、というよりも、その価値観を選んだのは親で、子どもはそれを知らずに親に従わされている光景、といったほうが正しいだろう。繰り返すが、それがいいとか悪いとかではない。「あなたの住む星がそうなるって

いるのなら、それはそうなのだろう」としか言いようがない。

では私の住んでいる星はどんな光景が見えているのか。そのエピソードを一つ紹介する。

平成三〇年四月二日のことである。仕事でくたびれて、さすがにその日は歩いて帰るのがつらく、途中からバスに乗ることにして、鶴三緒のバス停で一八時〇二分着を待った。

私のほかに、背の低い九〇歳前後と思われる女性もいて、どこまで行くのかと聞かれた。

「菰田（こもだ）西までです」。そう答えると彼女は私に、「しあわせの入口は右側にあつて、いつも開いているのに、人は開かない左側の戸を開けようとする。ヘレンケラーがそう言っています」と語りかけてきた。また「虫はいのちがないから生かされている」とも言い、彼女の携帯電話にかかってきた電話の相手には、「相手が変わらない？ だったらあんたが変わればいい。そうすれば世界が変わるよ」と話していた。

なんとなく不思議な気がして、「今日はとても疲れていたおかげで、こんな出会いがあった。

私はいつも運がいい」とお礼を言うと、そのように動かされているのが出会いというもの、といった意味の言葉が返ってきた。そこにやや遅れてバスが来て、彼女は歩きにくそうに杖をつきながら乗車した。

この話をギタリストの三吉哲司君にしたところ、その老婆の目に私が、〃この人になら話しかけてもいい〃というふう映ったのではないか。そしてそれは私から見ても同じで、ほかの人がそばにいても「え？ そんなお婆さんいた？」となるのではないかとのことだった。

【あなたは「起こす人」か　そして「起こされて目が覚める人」か】

大和先生の著書「和の実学」に、人を見定めるための、とてもわかりやすい「早起こしの論理」という短文がある。要約すると次のようになる。

.....

【早起こしの論理】

あなたの泊っているホテルが、深夜に火事になった。

目が覚めたのはあなた一人。ほかの宿泊客はみんな眠っている。

さて、あなたは誰を起こすか。

まずあなたは、隣に寝ている人を起こした。するとその人は一人で逃げてしまった。

次に、近くで寝ている人を起こそうとして何度も体をゆすつてみたが、なかなか起きてくれない。

そのうち全員が焼け死んでしまった。

あなたが最初に起こすべきは、あなたといっしょに宿泊客を起こして回る人だ。

.....

相手を見る時、この人は私といっしょに起こして回る人だろうか、それともセウオル号の船

長みたいに、真つ先に一人で逃げ出す人だろうか、あるいはいくら揺すつても目が覚めない人だろうかとの観察眼で、友人や知人を眺めてみると、大切にすべき人の優先順位が見えてくるような気がする。

さらに「早起こしの論理」にはもう二つ、大切なことが隠されているように思う。

一つは「自分は起こされる三人のうちのどれか」ということである。人をどう見るかの次は、自分はどうかということである。

もう一つ、自分が最初に目覚めたとして、しかし、そばで寝ている人を起こすとは限らないということである。

自分が真つ先に逃げる人なら、寝ている人を起こそうとは考えずに一人で逃げ出して、たとえ子どもが三百人死んだとしても、「自分は運がいい」と思うだろう。何度揺すられても起きないタイプであれば、自分が目覚めることなく焼け死ぬから、苦しみを感じはしないだろう。そして、人を起こして回るタイプの人は、いつしよに宿泊客を起こしてくれる人しか起こさない。なぜなら、真つ先に逃げ出す人も、ずっと目を覚まさない人も、起こして回る人の目に入らないからである。ここは「蝶は花に、ハエは糞に集まる」。そして「同じ方向に同じ速度で走っている車は止まって見える」で述べたとおりである。さて、あなた自身はこの三つのタイプのうちのどれ？

【蝶ネクタイを締めたハエ】

さて、再び花と蝶、糞とハエの話に戻る。

昆虫界には蝶とハエだけがいるわけではない。アリも、コオロギも、バッタもいる。そして蝶は蝶の、ハエはハエの、アリはアリの、コオロギはコオロギの、バッタはバッタの世界に暮らしている間はしあわせだ。それぞれに役割だつてあるだろう。たとえばハエは動物の死体や糞が土に帰るのを助け、栄養素を周囲にばらまいて拡散する役割があるそうだ。

ところがハエの中に、自分はハエではないと思いたがるハエがいる。「そこのハエといつしよにしないでくれ」というわけである。その瞬間、彼（もしくは彼女）の脳裏に次の言葉が浮かぶ。

「ひよつとして私は蝶かもしれない」。そう思つて自分の姿をながめると、首のところに蝶ネクタイを締めている。「やつぱりそうか!」。彼（もしくは彼女）はよろんで花に集まり、蜜を味わつてみるのだが、ちつともおいしくない。でも周囲には蝶が群れ、目を細めて蜜を吸っている。

「たぶんこれが密の味なのだろう」。彼はそう思い、表情を隣にいる蝶に合わせて、「おいしいですね」と、同様に目を細めるのである。頭の中に疑問符(?)をいくつも点滅させながら。

驚いたのは蝶である。ハエが自分と並んで花の蜜を味わいながら「おいしいですね」などと言っている。「そうですね」と返事しながら、「ハエに蜜がおいしいわけがないのに」と、蝶も

また???マークだらけの頭を傾(かし)げるのである。

実のところ、ハエだけでなく、アリやコオロギやバッタの中にも、自分を蝶だと信じている者がいる。本来彼らは違う種類だから、陽が西に傾いたら、ハエもアリもコオロギもバッタもそれぞれ別方向の家路に急ぎ、家族団らんを楽しむものだ。ところが蝶ネクタイをしたハエやアリやコオロギやバッタは家に近寄らず花に集まりたがる。なぜなら家では本当の自分に戻ってしまい、「私は蝶だ」とでも言おうものなら家族から大笑いされるからである。

花は無欲に咲いている。そこに蝶がやってきて、おいしい蜜を吸い、飛び去る。その様子を確認して、蝶ネクタイ組の虫たちがざわざわ集まってくる。彼らは蝶ではないので花を見つけられないからである。

一つの花にハエやアリやコオロギやバッタが群れて、仲が良さそうに蜜をなめているさまは異様な光景だが、蝶ネクタイを締めているためにお互いが蝶に見え、それが自分も蝶だと思ひ込む理由にもなっている。むろん蜜は口に合わないが、それが周囲に知れてしまうと、自分は蝶ではないことがばれるため、皆一様においしい顔をしている。でも、当人にとっては大真面目でも、意味のないウソは自分にも続かない。それを跳ね返そうとしているかのように、「この私を知らないのか!」とばかりに、シークレットブーツを履いて自分をいつそう高尚に見せたり、宝塚歌劇団みたいな大きな羽を背負って羽ばたかせたりしている虫もいる。

そこまで手間暇かけて、おいしくない蜜に顔をしかめるくらいなら、「その虫のプロ」を目指せば、意味のある成果を得られるだろうし、おいしい糞も毎日なめられる。でも自分は蝶のつもりだから、その道も見えてこない。ひよつとして深層心理のところで、その虫のプロにはかなわないことを知っていて、でも崇（あが）められたいから、手っ取り早く蝶ネクタイを締めて蝶になってみたのかもしれない。そのことに気がつかなければ、近道（ショートカット）をする癖は生涯改善されず、逆に永遠の遠回りになってしまっただろう。

しかし世の中はまことによくできていて、彼らにも救世主が現れる。蝶ネクタイをしたハエを標的とした、「蝶ネクタイをした糞」が登場するのである。

蝶ネクタイのハエの目には、蝶ネクタイをした糞は花に見える。香りも上等で、なめてみたら、とびきりおいしい。かくして蝶ネクタイ糞を太陽として、そのまわりを色とりどりの蝶ネクタイを締めたハエが、自慢げに得意げに回り続ける惑星系が成立し、ほかの惑星系や星たちに迷惑がおよばないようになるのである。

それにしても糞おもしろい話だと思わないか？ 糞が蝶ネクタイをして「私は花。蝶よ集まちなさい」とふんぞり返っていると、奇妙なハエがわらわら飛んで来て、本当においしそうにぺろぺろなめる。その光景を読者の皆さんにお贈りして筆を置くことにする。

終わりに

十三ページ目以降、たとえ話の紹介のあたりから、山口県周南市のギタリスト三吉哲司君の助言をかなり得た。ギターの世界にも蝶やハエの関係はありがちなようで、ずいぶんおもしろがってくれた。でも彼の宇宙を私は理解できないので、どんな場面があるのかはわからない。さらにこの話を、デザインショップ SLEEPER（新飯塚）の池上友則さんに話すと、「まるで俺じゃないっすか！」と大笑い。彼がどんな光景を思い浮かべたかは知らないが、「どうせならハエの王様がいいな」とぼつり。いやいやいや、ハエを集める側にまわったほうがよくない？。

平成三〇年四月二十七日脱稿

川本富士夫（かわもと ふじお）

■福岡県在住。一九五三（昭和二八）年、二百年続く農家の長男として山口県下松市に生まれた。国立宇部高等専入
学し学校法人聖光高等学校卒業。指針は「行動がすべてを解決する」と「自分の道にあるならおこなってよい」。日本
人のために自己啓発プログラムを書いた故ジョン・エンライト博士の、日本語で読める唯一の冊子「地球の未来を開
く鍵」の編集者。飯塚市の文野廣介（有）第一不動産社長とは、大和信春先生から共に学んだことを縁に、三十年来
の付き合いがある。中小企業大学校・直方校／人吉校の元客員講師。カンボジア王国シエムリアップ州のワッポーに
二年半ほど暮らした経験がある。日本尊厳死協会会員。元日刊地方紙編集長／医療系月刊新聞社編集長を経て、学校用
務員の職に就く。メールアドレスは do_ahoo@hotmail.com